

《令和七年度暗唱⑤》  
竹取物語  
たけとりものがたり

いまはむかし、  
たけとりの翁<sup>おきな</sup>といふ<sup>う</sup>ものありけり。  
野山<sup>のやま</sup>にまじりて竹<sup>たけ</sup>をとりつつ、  
よろづ<sup>ず</sup>のことにつかひけり。  
名<sup>な</sup>をば、さぬきのみやつことなむ<sup>ん</sup>  
いひける。

その竹<sup>たけ</sup>の中<sup>なか</sup>に、  
もと光<sup>ひか</sup>る竹<sup>たけ</sup>なむ<sup>ん</sup>ひと<sup>ひと</sup>すぢ<sup>ぢ</sup>ありける。  
あやしがりて、寄<sup>よ</sup>りて見る<sup>み</sup>に、  
筒<sup>つつ</sup>の中<sup>なか</sup>光<sup>ひか</sup>りたり。  
それを見<sup>み</sup>れば、  
三寸<sup>さんすん</sup>ばかりなる人<sup>ひと</sup>、  
いとうつくしう<sup>しゅう</sup>ていたり。

(おぼえるのはこちらだけです)



スタジオジブリ「かぐや姫の物語」より

(今の言葉で言うと：：)

今いまとなつては昔むかしのことですが、  
竹取たけとりの翁おきなという人ひとがいました。  
野山のやまに分け入いって、竹たけを取とっては、  
いろいろなことに使つかっていたそうです。  
名なを、讃岐さぬきの造みやづこと言いいました。

その竹たけの中なかに、

根元ねもとが光ひかっている竹たけが一本いっぽんありました。

不思議ふしぎに思おもって、近寄ちかよってみると、

筒つつの中なかが光ひかっています。

それを見みると、

一〇センチくらいの人ひとが、

とてもかわいらしい姿すがたで

座すわっている。

